

論文の内容の要旨

論文題目 空間の分節と場所の意味づけにかかわる地景の様相

氏名 二井 昭佳

近年、地方においてまちづくりの機運が高まっている。この動きに対して、景観の分野からあらためて強く、都市やまちの基盤である地形、とくに山河をまちづくりの基本に据えるべきだという主張がなされている。筆者はこの主張にまったく賛同するものである。シャッターの降りた商店街から目を転じれば、まだそこには美しい山や川を眺めることができる。これを、まちのアイデンティティに組み込み直していきたい。そのためには、風景づくりの実践を進めるとともに、人びとが地形の眺めをどのように価値づけてきたのかを明らかにする作業を続けていく必要がある。

地形の眺めに関する研究には多数の取り組みがあり、おおくの知見が蓄積されている。それらの研究が対象にしている地形の眺めを、視点の動静に注目してみると、借景庭園や眺望名所、絵画描画地点など、いずれも静的な視点が選ばれている。しかし、山の目利きと呼べる文人の紀行文からは、こうした眺めとは別に、動的な視点における地形の眺めの変化もまた、人々によって価値づけられてきた可能性がみてとれる。動的な視点における眺めの変化は、都市計画家などによって印象的な都市空間を形成するデザイン手法として注目されてきた。しかし、いずれも指摘の段階に留まっており、一定の知見を提示するまでには至っていない。

以上のような背景を踏まえて、本研究は、空間の分節や場所の意味づけにかかわる、山岳の眺めの変化の特徴を明らかにすることを目的とした。

この論考を進めるにあたり、山岳の眺めを山岳の地景、その様々な地景に対する見かたを地景の様相と呼ぶことにした。この様相には、山岳の客観的な視覚情報に対する主観的なかたちの捉え方という意味を持たせている。山岳の地景では、主観的な捉え方が、どのような客観的な視覚情報に基づいているのかを明らかにすることも射程に入れ、これらをいったん分離し、対照させるという論文構成をとった。

したがって、まず山岳の様々な透視形態をできるだけ客観的な視覚情報として整理する

ことを試みた。そのうえで、山岳の地景の変化を活用している事例の分析と考察を通じて、それぞれの事例において注目されている地景の変化の特徴を明らかにすると同時に、それと客観的な視覚情報との関係について考察した。それを踏まえて、空間の分節や場所の意味づけに活用される可能性の高い地景の変化の特徴を提示した。このような流れをとりながら、本論文は6章で構成されている。

第1章では、視覚対象としての山岳の特異性、地景の変化に対する文人のまなざし、景観の変化と空間の関係性などから、研究の視点・目的・方法について述べ、ついで、関連研究を整理するなかで本論文の位置付けを示した。

第2章では、既存の視知覚理論を整理したうえで、山岳の地景の変化を客観的な視覚情報として整理・考察し、それに基づく視点の領域の考え方を提示した。まず、地景の変化を考えるにあたっては、その透視形態のかたちに注目することは意味を持たず、変化のしかたに注目する必要があることを述べた。そのうえで、地性線に見立てた線分の透視形態の変化のしかたをCGによる三次元モデルを用いて整理し4つの特徴にまとめた。つぎに山岳の斜面が鉛直方向の傾きだけではなく水平方向の傾きも知覚することが難しいことを導き、斜面のかたちは主観的なかたちの捉え方に依存する可能性を指摘した。さらに、単純な山岳モデルを設定し、それぞれの山岳タイプにおける透視形態の変化のしかたをCGによる三次元モデルを用いて整理し7つの特徴にまとめた。

これらの結果をもとに、山岳の地景の変化を、その透視形態の構成要素の変化に注目して、大きくふたつ、細かく三つに分類した。具体的には、まず①構成要素が維持される変化と、②構成要素自体も変わる変化に分けた。①を変化がしばらく続くという点から「地景の持続」、②を瞬時に別の構成要素からなる透視形態に移り変わる変化という点から「地景の変移」と名付けた。さらに、①はその構成要素の可視量の変化に注目し、(a)歪みの持続、(b)関係の持続に分けた。この分類にしたがって、透視形態に基づく視点の領域の考え方を提示した。

第3章では、視点が山岳に対して側方へ移動する場合の地景の変化を考えるために、海図に記載されている山アテにかかわる海上地名「～出シ」を取り上げた。山アテは、アテ山と呼ばれる視距離の異なるふたつの山岳を利用して行われることが知られている。そこで、「～出シ」とその周辺におけるアテ山の地景の変化に注目し、アテ山の地景の持続領域と、漁場に深くかかわる海底隆起部の位置関係について考察した。

その結果、「～出シ」における地景の変化の特徴として次の6点を得た。

①漁業従事者による山アテの語彙から、注目されている地景の変移は、オヤ山の可視・不可視、アテ山の相接・乖離の2種類である。②「～出シ」によって決められる海上の領域は、アテ山の地景の変移に挟まれた地景の関係の持続領域に相当している。③この領域は集魚効果の高い海底隆起部と関係があり、目視できない海底隆起部が海上における地景の持続領域とおおむね対応している。すなわち、アテ山の地景の関係の持続領域に対して、漁場という意味づけがなされているといえる。④地景の関係の持続領域の大きさは、海底隆起部の大きさに依存せず、おおむね350m以下であることから、距離にして350m、時間に

して数分の移動の間に、この変化が体験されることが重要だと考えられる。⑤オヤ山の仰角および水平見込み角の値は、従来の注目されやすさの指標である、見やすい大きさを満足しない傾向にある。⑥「～出シ」に対応する地景は、アテ山の地形の組み合わせから 12 種類に分類できる。また、地景の変移の基本的な組み合わせは、可視・不可視+相接・乖離である。

第 4 章では、視点が山岳に対して前方に移動する場合の地景の変化を考えるために、神体山をもつ神社の参道を取り上げた。神社の参道は俗域から聖域へのアプローチとして計画的につくられていることが知られており、とくに神体山を持つ神社では神体山の地景が参道に影響を与えている可能性が高い。そこで、まず神体山の地景の持続領域を算出し、その領域と参道・鳥居の位置関係について考察した。

その結果、神体山をもつ神社参道における地景の変化の特徴として次の 6 点を得た。

①参道は複数の地景の持続領域を横断しているか、もしくは参道がひとつの持続領域におさまる場合にはその終点が地景の変移点に相当している。一の鳥居が位置する持続領域では、歪みの持続と関係の持続の両方がみられるが、二の鳥居より先の鳥居が位置する持続領域では、ほぼ関係の持続に対応している。②神体山の地景の持続領域の境界と二の鳥居の位置がおおむね対応している。すなわち、神体山の地景の変移を標示するように、二の鳥居が設置されている可能性がある。③一の鳥居と持続領域との関係性は見い出されない。一の鳥居は、10 事例中 8 事例で神体山の頂部が先鋭化するような地点にあり、残りの 2 事例では破綻のない透視形態が得られる地点にある。すなわち、一の鳥居では、既指摘どおりその透視形態のかたちが重要視されている。④両端に鳥居が配置されている地景の持続領域の幅は、事例数が少ないものの 400m 以下であることから、距離にして 400m、時間にして数分の移動の間に注目されやすい地景の変移が存在することが重要だと考えられる。⑤二の鳥居から先の地点における神体山の仰角の値は、従来の注目されやすさの指標を満足しない傾向にある。⑥注目されている地景の変移は、神体山頂部の不可視、頂部の並列の 2 種類である。

第 5 章では、3 章と 4 章で得られた結果を共通点と相違点に分けて考察し、注目される可能性の高い地景の変化の特徴を提示した。さらに、その結果を、2 章で提示した山岳の透視形態に基づく視点領域と対照させながら、地景の持続領域と眺望地点の関係について考察を試みた。

まず、注目される可能性の高い地景の変化の特徴は大きく以下の 2 点に集約できる。

①地景の変化が、地景の変移を含む地景の関係の持続領域に対応していること。②その領域が、距離にして 400m 程度、時間にして数分の間に①が体験される大きさであること。これらを満たす上で、その目的が空間の分節の場合には地景の変移、場所の意味づけの場合には地景の持続領域が活用される。なお、地景の変化においては、見やすい大きさよりも、むしろ、①や②が注目されやすいため指標であると考えられる。

また、注目されている地景の変化が、地景の持続のなかでもおおむね関係の持続に対応していることと 2 章の考察を踏まえて、歪みの持続の場合にはそのうちのひとつの透視形

態が代表景として認識される可能性を指摘した。

以上より、本研究の成果は、第一に、注目される可能性の高い山岳の地景の変化の特徴をまとめ、地景の変移論として提示したこと、第二に、山岳における客観的な視覚情報と主観的な私たちの捉え方の関係についての手がかりを提示したことである。